

## OKADA-ROOM Vol.13

## 画人・岡田三郎助一名品と愛用品一

### 会期　2019年2月26日（火曜日）～6月16日（日曜日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助(おかだ・さぶろうすけ、1869～1939)の画業と人物を顕彰してきました。館内の常設展示室「OKADA-ROOM」では、岡田作品を中心に館収蔵の近代洋画の優品を紹介しています。

平成31年2月26日から始まるOKADA-ROOMの新たな展示では、3月16日から開催のアトリエ移設1周年記念展「岡田三郎助の花物語一万花描く辻永とともに一」に連動し、館蔵を中心とする岡田三郎助の名品と、アトリエに遺されていた初公開資料を含む岡田三郎助の愛用品をご紹介します。

「岡田三郎助の花物語」展、岡田三郎助アトリエでの花の展示とあわせて、岡田三郎助の人と芸術をより深くお伝えします。ぜひ御鑑賞ください。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	<b>矢調べ</b>	<b>Testing arrows</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1893（明治26）</b>	<b>72.5×105.0</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	堀江正章が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた、岡田25歳の頃の作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、師より学んだ色の配置の工夫がみられる。のちに岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と回想している。（佐賀県重要文化財）						
2	<b>婦人像</b>	<b>Portrait of a Woman</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1909（明治42）</b>	<b>60.5×48.7</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	岡田41歳の頃の作品。女性の着物と背景の壁はシンプルな濃褐色でまとめられ、暗がりから肌の白さを浮かび上がらせるような効果を与えている。女性の表情も丁寧に描きこまれ、当時の筆の充実ぶりをうかがうことができる。岡田はこの時期、本作や《薊》（当館蔵）など、物思いにふけるようなメランコリックな表情の女性像をたびたび描いた。						
3	<b>西洋婦人像</b>	<b>Portrait of a Woman</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1900（明治33）</b>	<b>45.4×37.9</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	本作は留学3年目に描かれたもので、同構図の作品が東京芸術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するということも学んだのであった。						
4	<b>涼々園にて</b>	<b>At Sosoen</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1935(昭和10)</b>	<b>40.9×53.0</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>個人蔵</b>
	滞在していた旅館にて、《伊豆山風景》と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凛とした雰囲気を漂わせる。						
5	<b>裸 婦</b>	<b>Nude</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1935(昭和10)</b>	<b>99.8×65.5</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	岡田67歳、1935（昭和10）年の第二部会展に出品された作品。当時の新聞では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったとみられる。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。（佐賀県重要文化財）						

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
6	<b>伊豆山風景</b>	<b>Landscape of Izusan</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1935（昭和10）</b>	<b>65.1×100.1</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	1935（昭和10）年、岡田は伊豆・熱海を訪れ本作を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。熱海には1895（明治28）年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、多くの文化人や観光客を集めていた。						
7	<b>庭</b>	<b>Garden</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1919(大正8)</b>	<b>45.5×33.3</b>	<b>油彩・カンヴァス（板裏打ち）</b>	<b>館蔵</b>
8	<b>風景</b>	<b>Landscape</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1919(大正8)</b>	<b>53.3×33.5</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>館蔵</b>
	印象派を思わせる粗い筆致と、大胆な原色の用い方が特徴的な作品。穏健で上品な作風で知られる岡田だが、一方では、ゴッホの《ひまわり》の複製画や、強い陽射しの下 <small>の少女を描いた黒田清輝の《木苺》</small> をアトリエにかけていたと伝えられている。鮮やかな色彩のもつ魅力もよく知っていたのだろう。また、本作制作の前年に台湾へ赴いたことも、このような色彩の作品を描く契機になったかもしれない。						
9	<b>フローレンス風景</b>	<b>Landscape of Florence</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1930（昭和5）</b>	<b>22.0×28.1</b>	<b>岩絵具・絹</b>	<b>館蔵</b>
	旅に同行した画家、大橋了介の回想によると、岡田はアルノ川に面したホテルの窓から、現在も観光地として名高いこのヴェッキオ橋を描いたという。建物同士の重なるの描写やカラフルな色彩が際立ち、軽やかかつ装飾的な画面に仕上がっている。フィレンツェの街並みのリズムの面白さに、岡田は惹きつけられたようだ。						
10	<b>ローマの古橋</b>	<b>Old Bridge of Rome</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>昭和5（1930）</b>	<b>22.0×27.0</b>	<b>油彩・カンヴァスボード</b>	<b>館蔵</b>
	古代ローマ時代に建設されたローマ郊外の橋、ノメンターノ橋（Ponte Nomentano、現在の橋は19世紀の再建）を描いた作品。寒色を多用し、静かで抒情的な画面をつくりだしている。岡田は昭和5年に欧州視察に赴いており、ローマを訪れた際に、この橋まで足を伸ばしたことが分かる。実景を前に描いた作品ならではの新鮮な感興があらわれている。						
11	<b>縫いとり</b>	<b>Embroidery</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>1914(大正3)</b>	<b>72.7×42.4</b>	<b>油彩・カンヴァス</b>	<b>個人蔵</b>
	アトリエの応接室で刺繍にいそしむ岡田の妻八千代を描いた作品。当時の室内の様子が細かく描きこまれている。岡田が妻八千代を描いた作品は《支那絹の前》（1920年、高島屋史料館蔵）の2点のみである。						

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	材質等	所蔵
12	<b>チマブエ</b>	<b>Cimabue</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>石膏レリーフ</b>	<b>館蔵</b>
13	<b>リヒャルト・ワーグナー</b>	<b>Richaed Wagner</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>石膏レリーフ</b>	<b>館蔵</b>
14	<b>シャルル・ラムルー</b>	<b>Charles Lamoureux</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>石膏レリーフ</b>	<b>館蔵</b>
	岡田三郎助が制作したレリーフ作品。粘土で造形し石膏に置き換えたもので、彩色されている。岡田は折に触れて小箱等の工芸品や彫刻も手がけるなど、絵画だけでなく立体の小品を作ることにも熱心であった。また自身「彫刻家になればよかった」とも語るなど、彫刻的表現には並々ならぬ関心を寄せていたと考えられる。チマブエ（C.1240～1302）はイタリア、ゴシック期の画家。リヒャルト・ワーグナー（1813～1883）は高名なドイツの楽劇王、ラムルーはワーグナーと同時期に活躍したフランスの指揮者である。				

15	<b>白馬会章</b>	<b>Hakubakai badge</b>	<b>岡田三郎助</b>	<b>石膏レリーフ</b>	<b>館蔵</b>
	明治29年、岡田三郎助は黒田清輝、久米桂一郎らとともに、新風洋画団体「白馬会」を結成する。彼らの明るく清新な画風は多くの若き画家たちの支持を受け、同会は当時の洋画壇の中枢にまでなるに至った。白馬会では会員のために徽章を作っているが、本作はそのデザインの試作であろうか。				

No.	作品名・資料名	英訳	材質等	所蔵
16	石膏像 エルチェの貴婦人	La dama de elche	岡田三郎助使用 石膏	館蔵
17	石膏像 マリエッタ・ストロッチ胸像	Marietta Stozzi	岡田三郎助使用 石膏	館蔵

岡田のアトリエには多くの工芸品や調度品とともに、複数の石膏像もあった。これらはそのうちの2体で、観賞用として、またデッサンのモデルとして活用されていたものであろう。「エルチェの貴婦人」はスペイン・バレンシア州において発掘された、紀元前4世紀頃の制作と考えられる像。「マリエッタ・ストロッチ」は15世紀のイタリアで活躍した彫刻家ローラナの作。それぞれの石膏による複製である。

18	シルクハット	silk hat	岡田三郎助使用	館蔵
19	写生用イーゼルとパレット	easel and palette	岡田三郎助使用	館蔵
20	絵具箱	paintbox	岡田三郎助使用	館蔵

岡田三郎助が使用したもの。シルクハット (top hat とも称される) は燕尾服やモーニングコートに合わせて着用する礼装用の帽子。また帽子入れ (Hat basket) は革製。イーゼル (画架) は小型の折り畳み式で、屋外写生の際に使われたものである。パレットは裏面に「1897 Paris」と刻印があり、留学の際にかの地で入手したものであろう。絵具箱には「昭和14年5月16日 岡田三郎助」と直筆の署名がある。

## 佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内 1-15-23  
TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail: [hakubi@pref.saga.lg.jp](mailto:hakubi@pref.saga.lg.jp) Web: <http://saga-museum.jp/museum/>